

# パリ公主と韓国仏教

樋 口 淳

## 0. はじめに

韓国のムーダンが語るパリ公主物語の解説を通して、シャマニズムと韓国仏教の関わりについて考えてみたい。パリ公主は、韓国全土で最もよく知られた巫歌で、パリテギ (바리데기)、オグプリ (오구풀이)、七公主 (칠공주) 等と呼ばれ、中部地方のチノギクッ (치노귀굿)、湖南地方のシッキムクッ (씨김굿)、嶺南地方のオグッ (오구굿)、関北地方のマムムギクッ (맘목이굿) 等、死者の魂を慰めて彼岸に薦度する巫儀 (굿) の中で歌われてきた。

## 1. パリ公主の構造

韓国民俗のすぐれた研究者である依田千百子によれば、この巫歌は一九三七年にソウルの巫女・裴敬載の歌が秋葉隆によって記録されて以来、多くの研究者によって研究され、①巫祖神話の入巫過程 (秋葉隆)、②死の試練物語 (柳東植)、③魂返しの為の霊旅 (松前健)、④治病過程の原型の象徴 (李符永)、⑤末子勝利譚 (崔仁鶴) 等と様々に解釈されてきた。依田はこれを、ルーマニアの民俗学者であるミハイ・ポップ (Mihai Pop) の構造分析理論を援用して異界訪問譚と捉え、図1のような構造を提示している。

依田はパリ公主を、①男性によって統治されるこの世、②女子だけの誕生と不要な末娘の遺棄 (別離)、③主人公のこの世における遍歴、④援助者 (釈迦) の出現、⑤山神 (翁と媼) が公主の養父母となる、⑥公主の両親の病、⑦実父母による公主の搜索と発見、⑧公主の異界遍歴 (神仏の世界・地獄)、

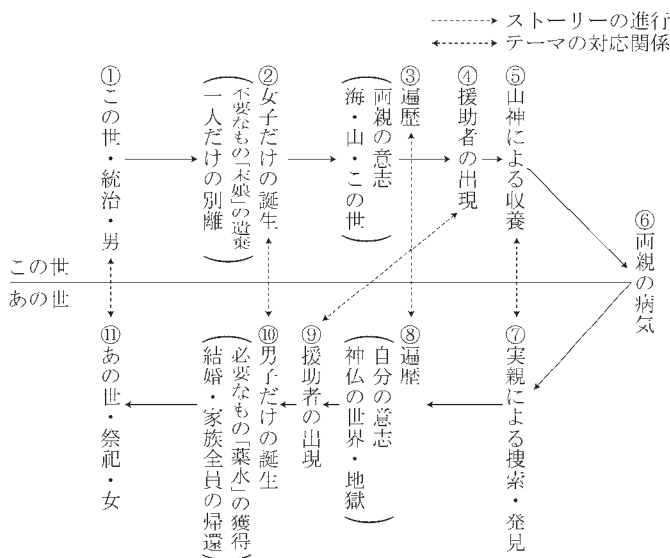


図 1

⑨援助者（無上神仙）の出現、⑩男子だけの誕生と必要なもの（薬水）の獲得と家族の再会、⑪女性（巫女）によって主宰されるあの世、という十一の構成要素からなるとする。

図 1 が示すように、この十一の構成要素は⑥の両親の病を転換点として折り返し、①と⑪、②と⑩、③と⑧、④と⑨、⑤と⑦が対応し、この世とあの世（異界）が反対世界として整然と提示される。しかも、このパリ公主の＜この世・あの世の対応構造＞は、韓国の神話や民話に多く見られる龍宮訪問（「作帝建伝説」など）、天上他界訪問（「きこりと天女」など）、地下他界訪問（「地下の国の怪盗退治」など）という①世界の果て、②海中、③天上、④地下の四つのタイプの韓国の異界訪問譚の構造に通底する普遍性を有している。

この構造の普遍性は、さらに韓国の口承文芸のみにとどまらず、日本の「天女女房」や「甲賀三郎」、ヨーロッパの「白鳥乙女」や「熊のジャン」という国境や言語や民俗の差異を越えた＜この世・あの世（異界）の対応構造＞に呼応する。

「パリ公主」の構造分析における依田のこの指摘は、興味深い。

しかしその一方で、こうした構造の高度な普遍性と抽象性は、「パリ公主」というきわめて韓国的な物語の独自性の解明を困難にすることも否めない。

そこで次に、ミハイ・ポップよりも抽象度の低いアルネとトンプソンの話型分類とウラジミール・プロップの形態学の立場から「パリ公主」の国際比較と構造を解説してみよう。

## 2. パリ公主の形態学と話型分類

アルネ・トンプソンの話型分類の立場からみると、パリ公主は AT707 の話型に属する。この話型はイタリアのストラパローラが「美しい緑の小鳥」として『愉しき夜 (Le piacevoli notti:1550-53)』に収めて以来、イタリアを中心にヨーロッパ全域に知られるようになったが、イタリア民話研究者の剣持弘子は十一世紀から十二世紀にかけてアラブで生まれた『千一夜物語』の「薔薇の微笑のフェアザード」がイタリアをはじめとするヨーロッパに伝播した可能性が高いとする。

剣持による要約にそってその話を紹介し、話のモチーフ（話の構成要素）の構成を、依田の図1とプロップの形態学にそって整理すると、次に太字で示す十五の構成要素が得られ、図2のように示すことができる。

「むかし、貧しい三人姉妹が結婚の夢を語り合い、長女が王の菓子職人と、次女が王の料理番と結婚したいと言う（①**未婚の王と娘たち**）。三番目の娘は王と結ばれたいと言い、もし願いがかなえば立派な男の子二人とく金と銀の髪をもち、泣けば真珠の涙が、笑えば金貨がこぼれ落ち、微笑みが薔薇のつぼみとなるような女の子を産むと言う。この話を立ち聞きしていた王は、三人の娘の望みをかなえ、自らは末の娘と結婚する（②**娘の約束と王と娘の結婚**）。末の娘は約束どおりの三人の子どもを産むが、彼女の幸せを妬んだ二人の姉は三回とも子どもを水に流し、「王妃は子犬、子猫、子ネズミを産みました」と王に報告する（③**娘の約束の成就とニセの情報の提供**）。姉たちは子どもたちを水に流すが（④**子どもたちの遍歴**）、子どもたちは王の園丁に拾われる（⑤**援助者による収養**）。園丁に拾われた子どもたちは立派に育ち、娘からは金銀

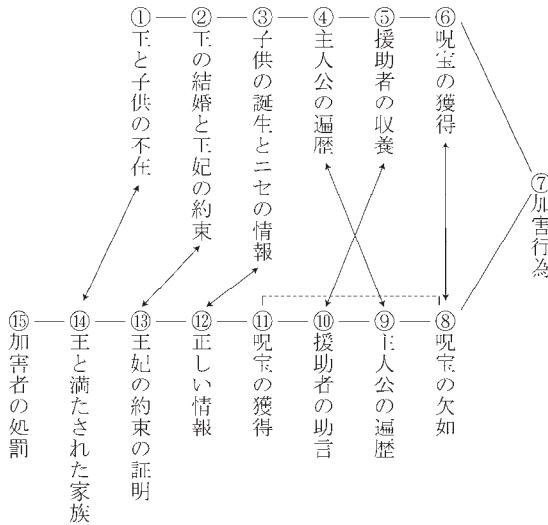


図 2

と真珠、そして薔薇のつぼみが生まれる（⑥魔法の宝の獲得）。一方、姉たちの偽りの報告を信じた王は、最初の二度までの出産は受け入れるが、三度目には王妃を遠ざけ、王宮の隅に閉じ込めてしまう（⑦加害行為）。

一方、娘の生み出す金・銀・真珠によって豊かになった王の園丁は立派な館を残して亡くなる。残された三人の子どもは館で幸せな日々を過ごす、ある日妹は、訪れた一人の老婆に館の庭に欠けている④ものいう鳥、⑤歌う木、⑥命の水という三つの宝の存在を知らされる（⑧三つの魔法の宝の欠如）。三つの宝がないことを悲しむ妹を喜ばせるために、二人の兄は宝の探索に出かけるが（⑨魔法の品探索の旅・遍歴 1）、途中で会った老人の「どんな声にも振り返ってはいけない」という忠告に従うことができずに振り向いてしまい、黒い石になってしまう（⑩援助者の助言の失敗・遍歴 1 の失敗）。

兄の帰りを待つ妹は、三つの宝と兄の探索に出発し（⑨魔法の品探索の旅・遍歴 2）、援助者の助言を守って声の誘惑を退け（⑩援助者の助言の成功）、三つの宝を手に入れて、命の水を黒い石に注いで兄たちを助け出し、館にもどって幸せに暮らす（⑪魔法の宝の獲得・遍歴 2 の成功）。

そしてある日、兄たちは森で王に出会う。王が兄弟の招きに応じて館を訪れると、ものいう鳥が王に真実を告げ（⑫正しい情報の提供）、王は王妃をふたたび王宮に迎え、王妃は命の水で美しさを取りもどし、王と子どもたちと一緒に幸せに暮らす（⑬王妃が約束を果たしたことが認められ、三人の子どもが帰還する）。王は王妃と娘に囲まれて幸せに暮らす（⑭既婚の王とその家族）。王妃を陥れた二人の姉は、王妃の幸せを見て嫉妬のために狂い死にしてしまう（⑮加害者の処罰）。(図2)

この十五の話の構成要素は、図1と同じく、⑦の加害行為を折り返し地点として、①と⑭、②と⑬、③と⑫、④と⑨、⑤と⑩、⑥と⑧+⑪が対比され、この世（現世における遍歴）とあの世（異界における探索）の対応構造が示される。(図2)

以上のような構造の普遍的な性格と話型としての世界的な広がりにもかかわらず、「パリ公主」はもともと韓国的な特徴を備えた物語である。とすれば「パリ公主」の韓国の物語としての特性はどのようなものなのか。次にこの問題を秋葉隆が1937年に記録したソウル巫女・裴敬載の＜死霊祭（チノグク）＞と、崔吉城が1971年4月19日の＜東萊サノグク・산오구굿＞で記録した金京南の語るペリテギ・オグ大王プリを中心に考えてみたい。

### 3. 韓国の物語としての「パリ公主」

パリ公主の韓国の物語としての特性は、これが＜クツ＞という儀礼の中で、シャマンによって聴衆を前に語られる一回的なパフォーマンスであること>に由来する。シャマンは、儀礼の初めに神々に呼びかけ、この世とあの世の境界を開くので、物語の主人公（パリ公主）は実際にこの境界を越えて、異界を旅し、苦難を重ね、魔法の宝（命の水）を手に入れることができる。

パリ公主の物語は単なる物語ではなく、儀礼の場に現出し、実際に行われるこの世からあの世への旅であり、異界から齎された宝（命の水）による死と再生そのものである。

そのためにシャマンもまた身をもってこの世を抜け出し、主人公を先導してあの世を旅する。シャマンの語りは微に入り細に入り、生々しい。「ペリテ

ギ・オグ大王プリ」を語るシャマン・金京南は男性であるにもかかわらず、厚化粧で、爪にマニキュアをして、髪には花を飾って女性に変身し、七人の公主の誕生のたびにその母（キルデ夫人）の生臭いつわりの苦しみを繰り返して語り、胎児の成長を詳細に語ってみせる。

金京南の語る〈公主の祖母にあたる大妃の出産の件〉は特に凄惨で、盗賊に囚われた大妃は巧みに盗賊を遠ざけ、貞節を守りながら公主の父（オグ大王）を出産し、その直後に血まみれの姿で縊死する。

そしてこの語りの生々しさは物語の最後まで続き、物語のクライマックスである〈オグ大王復活の場〉に至る。

オグ大王は、公主が命の水の探索に手間取るうちに死去してしまう。公主は殯<sup>もがり</sup>の後に大王の葬列がまさに埋葬地に向かう途中に帰還し、大王の喪輿の行列を止め、棺の蓋を開けて、骨を繋ぎ合わせ、腐敗した肉と皮膚を蘇らせ、目に光を与え、血液を流して大王を蘇生させる。

ここで聴衆は、大王の死に立ち会い、死者のおそろしい有様と、その復活を目の当たりにすることになるだろう。この〈命の水〉と〈死者の復活〉の場面の生々しさは、世界中に広がる AT 七〇七の話型のどのヴァリエーションにも見られない韓国の物語の特性であると言って差支えない。

## 4. パリ公主物語と仏教

### 4-1. シャマニズムと神々

日本のシャマニズム研究の第一人者である佐々木宏幹は、崔吉城を引用し、典型的な巫堂<sup>ムーダン</sup>の条件として①巫病体験、②神堂の所有、③巫儀の施行を挙げ、さらに金泰坤にしたがって、ソウルの神堂の神々の位階を①最上層（天界の神々）：天神（ハナニム）・玉皇天尊・日月星辰・七星など、②第二層（地上の神々）：山神・崔一（崔瑩）將軍・閔聖帝君・神将・別相・龍王・府君・上主神、③第三層：大神婆（巫神）、祖先神、④第四層：乞粒・下卒・雑鬼の四層に分けて紹介している。

しかし、すでに秋葉隆が指摘した通り神堂の構造は時代と地域によって異なり、個々の巫の行う儀礼ごとにも異なる。金泰坤もそれまでの調査（1978

年以前)で実に二百七十三種の神々を確認したと述べているので、この四層構造にしたがってパリ公主に登場する神々を説明し尽くすことはできない。

そこで、つぎに私たちはパリ公主の物語世界の構造と<この世>と<あの世>の関係、ヒロインである公主を援助する不思議な力の存在を個別的に検討し、パリ公主物語の世界観を具体的に明かにしてみたい。

#### 4-2. パリ公主の世界構造と神々、そして神々の使い

パリ公主の舞台は図1の通りで、父王の病を契機に地上の遍歴から異界の遍歴に折り返す。

まず物語冒頭で紹介されるのは、<寺(仏教)の本地・南西(インド)>で、①**ハヌニム**(天神)が治めている。そして仰ぎ見れば三十三天、伏し見れば二十八宿があり、八大將軍・南翁・無翁が方位を司る。国には江南(長江の南)の大漢国、海東の朝鮮国がある。朝鮮国王・李氏の本貫は、咸鏡永興の端川である」という朝鮮王・李氏を中心とした世界であり、仏教の本地が西方のインド、そこに江南(中国)が続き、さらに朝鮮国に至るとする。そして国王・李氏の本貫は、中韓の境界に近い端川であり、朝鮮王は宇宙の中心に位置し、須弥山(三十三天)を仰ぎ見ることができる。

つぎに、王が世子誕生について伺いを立て、②**天下宮の玉皇大帝、帝釈宮の帝釈天**の存在が語られ、天の意は③**ト占**という仲介によって告げられ、それを軽んじた王の世子大君には<七人の公主>が与えられる。

公主誕生は七度繰り返され、それに耐えきれなかった王は、第七公主を王宮の後園に捨て、公主の地上の遍歴が始まる。

その遍歴を助けるのが、まず④**カササギ**であり、つぎは⑤**金亀**であり、公主を守り、公主を納めた玉函を東海の果てに連れていく。

すると⑥**釈迦世尊**と目連尊者・迦葉尊者がカササギの声によって異変に気づき、玉函を発見する。釈迦世尊は通りかかった⑦**翁・媼(山神)**に食物と衣類と住居を与え、公主の養育を託する。

翁・媼が公主を育てるうちに、王は病に倒れ、王が③**ト占**によって天下宮と帝釈宮の天帝の意を伺うと、第七公主を探せという卦が出て、公主探索が始まる。

公主の探索を託された禮大臣は、④カササギの案内でパリトキ（公主）を発見する。

父母の危機を知った第七公主は、男装して、三神山の不死薬、無上神の薬霊水等を求めて西方浄土に旅立ち、途中⑥釈迦世尊と地藏菩薩・阿弥陀仏に出会い、不思議な力をもった羅花を授かる。

第七公主は羅花の力に導かれ、ついに⑧無上神仙に出会う。無上神仙は、公主にそれぞれ三年の水汲み、火焚き、伐木という試練を与え、さらに妻となり7人の男子を産むことを求める。

公主は父母が同日に命を失った夢をみて、朝鮮（この世）に帰還する。旅の途中、韓中国境の⑨楚山の牧童に父母の葬儀を聞き、都に急ぎ、父母の喪興を止め、薬水の力で父母を蘇生させる。

パリ公主の物語を以上のように要約すると、登場する神々と神々の使い（この世とあの世を繋ぐ者）は、①ハヌニム（天の神）、②天下宮の玉皇大帝（道教の最高神）、帝釈宮の帝釈天（須弥山の仏教護法神）、③シャマンのト占、④カササギ、⑤金亀、⑥釈迦世尊、⑦功德を求める翁・媼（山神）、⑧無上神仙（道教の神仙）、⑨楚山川の牧童（降臨道令・韓国固有信仰の死神）の9つのタイプで、そのうち仏教に由来する神は帝釈天、釈迦世尊の二神にすぎないが、釈迦世尊は主人公パリ公主の命を救い、山神に養育を委ねたのみならず、主人公が命の水を求めて向かう寺（仏教）の本地（インド）への道を示し、羅花を与えて険しい探索の道を切り拓くという最も重要な役割を果たす。

パリ公主の物語の中で、仏教はもっとも重要な背景を成していることは間違いない。

しかしながら、物語の最終盤で主人公の公主が萬神の王となり、巫女の始祖となり、⑧無上神仙はクツの儀礼の街祭、路祭の食器大卓（供物の品々）を受け、⑤釈迦世尊は追善供養（初斎、二斎、四十九斎、百斎）を受け、⑨牧童は降臨道令（死者の導き役）として七尺七寸の明道手巾を受け、⑦功德の媼は荊門鉄門の麻布を、⑦翁は伐草ナムヒャン（不明）を受け、七人の子どもは二銭一分の仏銭を受けることによって、＜あの世とこの世のプレゼント交換（互酬の関係）＞が終わり、シャマンの儀礼（クツ）が終わって、あの世とこの世を繋ぐ門と道が閉ざされると、すべての神々はあの世に去り、神々



の使い（カササギ・金亀・ト占）はあの世とこの世を仲介することを止める。クッの終わりとともに<シャマンの祈りと呼びかけによって、あの世とこの世の間の境界が開かれ、仏教のみならず、玉皇大帝や無上神仙のような道教の神々、ハヌニムや山神のような韓国固有信仰の神々が、カササギや金亀に乗り、羅花の不思議な力によって、あの世とこの世を通交すること>はなくなる。

## 5. 韓国のシャマニズムと仏教

### 5-1. 仏教の多様性

ここで、韓国仏教についての私見を述べておきたい。

私は韓国仏教に関しては、若干の経験知があるだけで、ほとんど何も知らないし、現在保有する経験知の寄せ集め（bricolage）以上の何かを学ぶことは難しいと考えている。というのは、私にとって韓国仏教はあまりに多様であるだけでなく、その多様性は私のほかの誰にも克服し難いと思われるからである。

私は、例えば現在の韓国都市近郊寺院で行われる「大学入試祈祷」について多少の知識があり、試験の約一カ月前に行われる「徹夜精進祈祷」に参加する母親たちが熱心な「祈祷者」であることを疑うことができない。しかし、そこで彼女たちが仏教の何を信じているのかは分からない。

韓国の母親にとって大学入試が重要なことは理解できるが、同じく入試に夢中な日本の受験生や母親は、天満宮のような神社にお参りして、合格鉛筆を購入し、絵馬を奉納するだろう。

それと同様に、日本では死者を弔うにあたっては、つい最近まで僧侶が読経し、死者を菩提寺の墓地に埋葬することが一般だったが、韓国では葬式に僧侶が関与することはなく、墓地は風水によって決定されることが多かった。

入試や葬式というような卑近な事例を挙げてみても、韓日の間で仏教の果たす役割は異なる。この違いを東アジアからインドまで広げてみれば、どういことになるかは想像に難くない。そこで次に問題を「パリ公主物語」にかぎってその論点を整理し、韓国仏教とシャマニズムの他界観（異界観）に

ついて考えてみよう。

## 5-2. 仏教とシャマニズムの他界観

大学入試祈祷に参加する熱心な祈祷者である韓国の母親たちの一人一人が、果たしていかなる他界観を有しているかは不明だが、彼女たちの多くが旧暦の正月や秋夕の機会に、家族とともに夫や自らの実家を訪れて、歳拝や墓参を行うことは少なくないだろう。この時に彼女たちが参加する儀礼は、ロジャー・ジャネリと任敦姫が『祖先祭祀と韓国社会』や「韓国農村の祖先祭祀と資本主義的産業化」で紹介した祖先祭祀のルールに基づくことが多いに違いない。これらの儀礼は、一般に①儒教に基づき男性によって担われる祖先祭祀と、②女性（主婦）によって担われるシャマニズムの儀礼（不遇な死者の供養と家内祭祀）とに別れるとされるが、その他界観は共通している。

すなわち人は死ぬとあの世（他界・異界）に旅立つが、あの世での死者の生活はこの世と変わらない。子どもを初めとする男系の子孫が孝養を尽くし、手厚く祭祀を行い、三年の喪を果たし、日当たりのよい墓を用意し、場合によっては祠堂を設けて、決められた祭日に供物を奉げれば、死者はその返礼として子孫を守り、家の繁栄を保証する。

しかしながら、こうした手厚い祭祀を受けられる死者の数は限られている。不慮の死をとげ、決められたルールに基づく人生を歩むことができず、未婚のままに死んだ男女の死者などは、あの世に旅立つことができず、祖先祭祀を受けることもできず、＜鬼神＞としてあの世とこの世の境を彷徨い、子孫に祟りをなす。そこで女性たちが主宰するシャマンの儀礼が不遇な死者を供養し、あの世に薦度するのである。

こうしたあの世の死者とこの世の子孫との＜プレゼント交換（互酬関係）＞の儀礼（子孫が祖先を供養し、祖先はその供養に応じて子孫を守るという互酬関係）は、もちろん韓国にかぎらず、日本にも見られるし、欧米のキリスト教国の人々の間にも見られるが、韓国の祖先祭祀とシャマニズムの儀礼の場合は、それが際立っている。そしてこの儒教・シャマニズム式の＜あの世とこの世の交流の公式ルール＞は、輪廻転生や涅槃を基本とする仏教の公式ルールとはまったく異なる。

パリ公主物語の世界観の分析ですで見たとおり、シャマンの語る物語の背景には仏教が存在し、道教や山神をはじめとする韓国の民俗信仰の神々が重要な役割を果たしているが、そこに登場する仏教はシャマニズムの他界観に組み込まれた仏教であり、仏教本来の＜命ある者が何度も転生しながら、解脱と涅槃を目指す＞という世界観とは異なる。仏教の信奉者は、修養によって悟らなければ輪廻から解放されないが、韓国の死者たちは＜孝の論理＞に基づいて子孫が孝養を積めば、死後も安楽に暮らせるし、万一死後の暮らしに不満があれば、怒りを発し、子孫を保護することを止めるか、子孫に祟ればよいのである。

仏教においては、死と救済は個人の問題であり、あの世とこの世は明確に分かれているのに対して、韓国の祖先祭祀とシャマニズムにおいては、死者は死後もその一族と深い絆によって繋がれており、あの世とこの世の境界も、門を開き橋をかければいつでも通交可能であり、死者と子孫の間には互いにプレゼント交換可能なシステム（互酬関係）が維持されている。

## 6. まとめ

パリ公主は、今日まで＜韓国で最もよく知られた韓国独自の物語＞とされてきたが、実は＜世界に広く分布し、それぞれの国や地域の民俗のうちに溶け込み、愛され語り継がれてきた最も人気のある物語＞の一つである。

しかしこれをもう一度、＜今も昔も韓国の人々の暮らしの中に生き続けるシャマニズムの起点となる物語＞として読み解くと、＜世界の国々や地域の他のどこにもない独自の物語＞となり、韓国独自のシャマニズムや儒教の文化や世界観を解明する鍵となるだろう。

## 主要参考文献

1. 秋葉隆著『朝鮮巫俗の研究』大阪屋書店・1937年・ソウル（1966・学文閣・ソウル）
2. 韓国文化広報部文化財管理局編・任東権・竹田旦訳『韓国の民俗大系・全羅南道篇』国書刊行会・1988

3. 韓国文化広報部文化財管理局編・任東権・竹田旦訳『韓国の民俗大系・慶尚南道篇』国書刊行会・1988
4. 金香淑編著『朝鮮の口伝神話』和泉書院・1998
5. 依田千百子著『朝鮮民俗文化の研究』瑠璃書房・1985
6. 桜井徳太郎編『シャーマニズムの世界』春秋社・1978 年（崔吉城・金泰坤論文所収）
7. 豊島与志雄他訳『千一夜物語』岩波書店・1982
8. ロジャー・ジャネリ 任敦姫著『祖先祭祀と韓国社会』第一書房・1993
9. 樋口淳著『妖怪・神・異郷』悠書館・2015

#### 付論 「パリ公主」物語とはなにか

韓国のシャーマニズム理解のために重要な「パリ公主」の物語は、本稿冒頭ですでに述べたようにク（哭）と呼ばれるシャマン（巫堂）の儀礼で歌われる巫歌である。そのために、女たちを中心としたシャーマニズムの世界ではよく知られた物語だが、男たちとその漢字文化が支配した朝鮮王朝時代にはまったく文字化されることなく、巫堂の語りを通じて民衆の間で伝承されてきた。

その巫歌の重要性に初めて気がついたのは、一九二〇年に二十才で日本留学を果たし、早稲田大学で窪田空穂や西村眞次、津田左右吉等の指導を受けていた孫晋泰である。彼は、一九二三年夏の帰省中に咸鏡南道咸興郡の友人宅で大巫金雙石尹の創世歌を聞いたことをきっかけに各地で巫歌の調査を行い、一九三〇年に郷土研究社から『朝鮮神歌遺篇』を出版し、八曲の巫歌を韓国語と日本語の対訳の形で紹介した。

その後、孫晋泰とともに朝鮮民俗学会を設立した京城大学の秋葉隆が巫歌の調査を継承し、孫晋泰と同じく韓国語と日本語の対訳の形で出版した『朝鮮巫俗の研究』（1937）の冒頭に紹介したのがこの「捨姫（パリ公主）」である。

「パリ公主」は、その後韓国では多くの研究者が研究・記録して今日に至っているが、日本ではごく限られた韓国シャーマニズムの研究者以外は、曲の名

前は知っていても物語の細部までは知ることは少ない。

そこで、以下に依田千百子が提示した 1. 男性によって統治されるこの世、2. 女子だけの誕生と不要な末娘の遺棄（別離）、3. 主人公のこの世における遍歴、4. 援助者（釈迦）の出現、5. 山神（翁と媼）が公主の養父母となる、6. 公主の両親の病、7. 実父母による公主の搜索と発見、8. 公主の異界遍歴（神仏の世界・地獄）、9. 援助者（無上神仙）の出現、10. 男子だけの誕生と必要なもの（薬水）の獲得と家族の再会、11. 女性（巫女）によって主宰されるあの世、という図式にそってパリ公主の物語を紹介する。物語の紹介にあたっては、巫堂の語りの内容と形式を出来るかぎり尊重するよう努めた。

なお本稿は、2022 年 8 月 27 日に韓国の全南大学でズームを利用して開催された韓日共同学会議「民間宗教と仏教」での報告要旨に加筆修正を加えたものである。

## 捨姫（パリ公主）の物語

### 1. 男性によって統治されるこの世

諸国に功を立てた寺は多いが、寺（仏教）の本地は南西（インド）で、ハノニム（天主さま）が治めておられる。仰ぎ見るれば三十三天があり、伏し見れば二十八宿がある。八大將軍・南翁・無翁が方位を司られる。国には江南（長江の南）の大漢国があり、海東の朝鮮国がある。朝鮮国王・李氏の本貫は、咸鏡永興の端川である。京畿道は三十七郡あるが、中でも楊州は大郡である。ソウルには昌徳宮・昌慶宮・慶福宮があり、大闕宗廟・社稷・位牌が祀られている。

世子大君の父母である両殿下は、歳を重ねておられ、正殿も内殿も空ろである。大君が十五歳になったので、「世に優れた占師を求めて、吉凶を占わせよ」と命じた。

尚宮（高位の女官）が「天命を告げる幣（ぬさ）を納めるには、供え物が必要です」と答えたので、銀錢五匁、金錢五匁、真珠三升三合、絹三尺三寸などを用意し、天下宮の多智博士、須弥山・帝釈宮の牡丹博士、地下宮のソシルアク氏、明道宮の降臨博士に捧げ、白玉盤上に白米を投じて占えば、最

初は萬神（巫女）の一投、次は上下の門神の一投、三度目が両陛下の占いとなった。

「吉凶を申し上げるのは畏れ多いが、<sup>いつわ</sup>詐るのはなお難しい。いますぐ＜閉吉年＞に契りを結べば七人の公主（姫）を得、時を待ち＜大開年＞を迎えれば三人の東宮（王子）を得ることとなります」

これをそのまま申し上げれば、「一刻は三秋のように、一日は十日のように思われるので、とても＜大開年＞を待つことはできない」と家臣すべてを集め、天文占いの観象監に吉日を選ばせると、三月三日の節句に妻問いし、五月五日の端午に妻問いし、七月七日の牽牛織女がカケスのかけた橋を渡る折に三度目の妻問いをすべしと、定まった。

路下には三千の兵馬、路上には五千の兵馬、家臣一同が鳥角帯をおびて控えるなか、別宮に東床を定め、玉床に雁を供え、合巹酒（婚礼の酒）を下されると百官の家臣は一斉に万歳と唱した。

## 2. 女子だけの誕生と不要な末娘の遺棄（別離）

時が流れ、夏三月を過ぎると妃の玉体に異常があらわれ、食事がままならないので、果実を内殿に進上させた。尚宮が妃の様子を王に申し上げると、「天下宮に問卜させよ」というお言葉なので、天下宮の多智博士、帝釈宮の牡丹博士が、珊瑚算を玉盤に投じて占えば、最初は萬神（巫女）に、次は上下の門神に、三度目が大王陛下の占いとなった。

最初は萬神（巫女）の一投、次は上下の門神の一投、三度目が両陛下の占いとなった。

「いずれお分かりになることですが、明年の上吉年に吉禮をあげておられれば世子大君が誕生し、三国の王となられたところですが、閉吉年に吉禮を挙げられたので、初公主を儲けられることになります。

侍女尚宮がこう申し上げると、大王は「占い師に何が分かる」と仰せられた。

### 2-1. 第一公主の誕生

しかし一、二カ月が過ぎ、三カ月が過ぎると血が集まり小骨は溶け、大骨は<sup>たわ</sup>撓む気配で、五カ月になると内産室廳、外産室廳などの役人や侍女たちが常に様子を窺い、七カ月と七日、九カ月と九日ともなると黒紗・青紗の倚布

団を用意して、都に入る反物はすべて内殿に進上させ、各郡の罪人に恩赦を与え、成均館の学問所を閉ざし、十カ月になると産室廳を設けると、公主が誕生した。

三千の侍女・尚宮が、大王に公主の誕生を申し上げると、王妃の七代中殿殿下に尋ねてくるようにとのことだった。

中殿殿下のお言葉は「公主誕生の同時刻に夢を見たが、片方の肩には月が昇り、片方の肩には日が昇るのが見えた。子守り、乳母などを手厚く置き、〈紅桃公主〉と名づけて大切に育てるように」とのことであった。公主の別名はタリチャン阿氏である。

## 2-2. 第二公主の誕生

歳月が流れて公主が三歳になると、王妃ご懐妊の徴<sup>しるし</sup>がまた現れた。

食事がままならないので、果実を内殿に進上させた。三カ月が過ぎると血が集まり小骨は溶け、大骨は撓<sup>たわ</sup>む気配で、五カ月半期、七カ月と七日、九カ月に産室廳を設け、十カ月と十日で公主が誕生した。

「公主が誕生したからには、いずれは世子も誕生されるだろう」と子守り、乳母などを手厚く置き、大切に育てられた。

## 2-3. 第三公主の誕生

歳月が流れて第二公主が三歳になると、王妃ご懐妊の徴がまた現れた。

食事がままならないので、果実を内殿に進上させた。三カ月が過ぎると血が集まり、五カ月半期、七カ月と七日、九カ月、十カ月と十日で公主が誕生した。

その姫も、子守り、乳母などを手厚く置き、大切に育てられた。

## 2-4. 第四公主の誕生

無情の歳月が流れて第三公主が三歳になると、王妃ご懐妊の徴がまた現れた。小骨は溶け、大骨は撓<sup>たわ</sup>む気配で、食事がままならないので、果実を内殿に進上させた。

妃の様子を尚宮が王に申し上げると、「天下宮に問卜させよ」というお言葉なので、尚宮（高位の女官）が「天命を告げる幣（ぬさ）を納めるには、供え物が必要です」と申し上げ、銀錢五匁、金錢五匁、真珠三升三合、絹三尺三寸などを用意し、天下宮の多智博士、須弥山・地下宮のソシルアク氏、明

道宮の降臨博士、帝釈宮の牡丹博士に捧げ、白玉盤上に白米を投じて占えば、最初は萬神（巫女）の一投、次は上下の門神の一投、三度目が両陛下の占いとなった。

「申し上げるのは畏れ多いが、<sup>いつわ</sup>詐るのはなお難しい。〈上吉年〉に契りを結ぶべきなのに、〈閉吉年〉に契りを結んだので第四公主が誕生されるでしょう」

侍女尚宮がこう申し上げると、大王殿下は「占い師に何が分かる」と仰せられた。

一、二カ月は過ぎ、三カ月となると血が集まり、五カ月半期となると内産室廳、外産室廳、承伝伝官、奉旨別監、宮廷中の百官、三千の宮女が内殿に常に控えていた。

七カ月と七日と過ぎ、九カ月と九日ともなれば、前には青紗の倚蒲団、後ろには黒紗の倚蒲団を用意して、都の四大門から入る反物はすべて内殿に進上させ、十カ月たつと産室廳を設け、公主が誕生した。

大王は「公主が誕生したからには、いずれは世子も誕生されるだろう。子守り、乳母などを手厚く置き、大切に育てよ」と仰せられた。

## 2-5. 第五公主の誕生

無情の歳月は流れる波のようで、夢のように流れて第四公主が三歳になると、王妃ご懐妊の徴がまた現れた。小骨は溶け、大骨は撓む<sup>たわ</sup>気配で、食事がままならないので、果実を内殿に進上させた。

七カ月と七日と過ぎ、九カ月と九日ともなれば、真珠の肘掛を除き、十カ月たつと第五公主が誕生した。

大王は「公主が誕生したからには、いずれは世子も誕生されるだろう。子守り、乳母などを手厚く配慮し、前には青紗の倚蒲団、後ろには黒紗の倚蒲団、九房の絹帳裡をめぐらせて大切に育てよ」と仰せられた。

無情の歳月が流れて公主が三歳になると、王妃ご懐妊の徴がまた現れた。鴛鴦の衾、飾り枕、東窓に吹く風にも起居しがたい気配ないので、侍女尚宮が大王に申し上げると、「天下宮に問卜させよ」と命ぜられる。

尚宮（高位の女官）が「天命を告げる幣（ぬさ）を納めるには、供え物が必要です」と申し上げ、銀錢五匁、金錢五匁、真珠三升三合、絹三尺三寸などを用意し、天下宮の多智博士、須弥山・地下宮のソシルアク氏、帝釈宮の



牡丹博士、明道宮の降臨博士に捧げ、白玉盤上に白米を投じて占えば、最初は萬神（巫女）の一投、次は上下の門神の一投、三度目が兩陛下の占いとなった。

「中殿殿下のご懷妊は明らかなだが、〈閉吉年〉に契りを結んだので第六公主が誕生されるでしょう」

侍女尚宮がこう申し上げると、大王殿下は「占い師に何が分かる」と仰せられた。

## 2-6. 第六公主の誕生

一、二カ月は過ぎ、三カ月となると血が集まり、五カ月半期となると内産室廳、外産室廳、承伝伝官、奉旨別監、宮廷中の百官、三千の宮女が内殿に常に控えていた。

七カ月と七日と過ぎ、九カ月と九日ともなれば、前には青紗の倚蒲団、後ろには黒紗の倚蒲団を用意して、都の四大門から入る反物はすべて内殿に進上させ、十カ月たつと産室廳を設け、公主が誕生した。

大王は「公主が誕生したからには、いずれは世子も誕生されるだろう。子守り、乳母などを手厚く置き、九房の絹帳裡をめぐらせて大切に育てよ」と仰せられた。大切に育てよ」と仰せられた。

## 2-7. 第七公主（パリ公主）の誕生

山河千里の国、歳月は夢のように流れ、王妃ご懷妊の徴がまた現れた。鴛鴦の衾、飾り枕、東窓に吹く風にも起居しがたく、小骨は溶け、大骨は<sup>たわ</sup>撓む気配で、食事のままならないので、果実を内殿に進上させた。

妃の蓮花の如く美しい顔も痩せ衰え、か弱きお身体には耐えがたく見えたので、尚宮が王に申し上げると「妃の夢は如何か」と仰せられた。

王妃が「右腕には青鷹がのり、左腕には白鷹がのり、膝には金の龜がとまり、両肩には日月が昇るのが見え、第明殿の棟上には青龍黃龍が絡み合って見えました」とお答えになった。

これを聞いた大王は「このたびは世子大君を儲けたまうべき夢であるから、天下宮に問トさせよ」というお言葉なので、尚宮が、占いの供え物として銀錢五匁、金錢五匁、真珠三升三合、絹三尺三寸などを抱き、天下宮の多智博士、須弥山・帝釈宮の牡丹博士、地下宮のソシルアク氏、明道宮の降臨博士

に捧げ、白玉盤上に白米を投じて占えば、最初は萬神（巫女）の一投、次は上下の門神の一投、三度目が兩陛下の占いとなった。

「いずれお分かりになることですが、お妃の御妊娠の徴は明らかですが、閉吉年に吉禮を挙げられたので、第七公主を儲けられることになるでしょう」

侍女尚宮がこう申し上げると、大王は「問卜には靈驗があるが、占い師に何が分かるか。妃の夢もある」と仰せられた。

三カ月が過ぎると血が集まり、五カ月半期、七カ月と七日ともなると内産室廳、外産室廳、六矣藥房が指令を待ち、承伝伝官、奉旨別監、承伝内侍が常に控え、五部、朝鮮八道、ソウル四大門に布告し、死刑を廃し、罪人に恩赦を与えた。

八カ月と八日、九カ月九日、十カ月十日を迎えると、真珠の脇息を除くと、第七公主が誕生した。

王妃が涙を流されたので、大王は「この奥深い宮中に女の泣き声とは、何事だ」と尋ねた。

尚宮侍女たちが「申し上げるのは畏れ多いが、<sup>いっつわ</sup>詐るのはなお難しい」と公主の誕生を告げると、大王はその手で書案を打ちつつ「汝らも恥を知らない。なんの面目があつて私に顔を合わせることができるのだ。天は七人の娘を与えとは、私が前世にどのような罪を犯したというのか」と嘆かれた。

## 2-8. 第七公主（パリ公主）の遺棄

香炉と香盒を散らして、「宗廟と社稷を誰に伝えたらよいのか。万民朝廷を誰に伝えたらよいのか。万民百姓を誰に伝えたらよいのか。侍女尚宮たちよ、三千宮女たちよ、その子（公主）を、ただちに王宮の後園に捨てよ」と仰せられた。

王妃はそのお言葉を耳にして、「国家は情けを知らないとは言うが、どうして公主を捨てることができようか。宮廷に集う百官、侍女尚宮たちよ、せめて公主を収養女にあずけて育てよ」と言うが、「国家の法が許さぬ以上、しかたなし」と、生後七日の産着の上衣と下衣に生月生時を書いて紐で結び、公主を後園に捨てて立ち返った。

### 3. 主人公のこの世における遍歴

後園の山は深く、水は潺々<sup>せんせん</sup>と流れ、風は吹きすさぶが、いずこからかカササギが飛び来たって、翼を敷き、翼を掛けて公主を包み込んだ。

さて、ある温かい春の日に、大王が武芸者たちを従えて、後園の花柳の見物に出ると、東の空に瑞気がかかりカササギが騒がしく鳴いた。

大王は「瑞気が空にただようのは国家に異変がおこる前兆である。あそこには何かあるのでカササギが鳴くのだ」と仰せられた。

尚宮侍女が「このたび誕生なさった公主を<捨てよ>と命ぜられたので、お言葉に逆らうこともできず後園にお捨て申し上げましたが、その姫の泣き声<sup>かす</sup>が微かに聞こえたものです」と申し上げた。

王妃さまが「姫を抱いてきなさい」と仰せられ、ご覧になると、耳には王蟻が、口には金蟻が、目には糸蟻が満ちていた。

王妃さまは、蓮の花のように美しい顔に真珠のような涙を二筋流されて、「国法は情けを知らないというが、どうしてこのように哀れに捨てたのか」と仰せられた。

大王さまは、これに対して「宮廷の百官たちよ、私が罪を犯した贖<sup>あがな</sup>いとして、四海龍王に姫を贈ろう。美しい玉函を函匠を用意させよ」とお仰せられた。

玉函のなかに姫を入れる時、玉瓶に乳をしぼり入れて姫の口に咥えさせ、生月生時を書き記して紐に結んだ後に王妃が仰せられるには、「どうして血肉を分けた姫を水中に投げ入れることができますか。子のいない臣下に養女として賜ることはできないのですか。どうしても捨てなければいけないのなら、せめて名前をつけてください」

大王は、公主に「捨てた捨子（パリトキ）、投げた投子（トチトキ）」という名を与えた。

玉函に金亀の鉦を斜めに挿し、<七公主>の三文字を金で刻み、大臣を呼び、御酒三杯を下すと、大臣は玉函を背負って大門の外に走り出て、何処かに去った。

この時カササギは、大臣の頭上を引導し、草木の繁みを導き、一千里、二千里、三千里を行き、カルチ山、カルチ峠、プルチ山、プルチ峠、オサチテ

サチ阿弥陀仏と念仏し、嶺を越え行けば、前には黄泉、後には流沙江が控える。

玉函をカササギの浅瀬、冬の海に投ずれば、初めは湧き上がり、次には水柱が立ち、三度目には水が血の色に変わり、雷鳴とどろき稲妻が走ると、どこからか金亀が現れ玉函を背にして東海に姿を消した。カササギが飛んできて、玉函を翼に抱くと、夜は霧がかかり、昼は雲に覆われた。

#### 4. 援助者（釈迦）の出現

さて釈迦世尊さまが、目連尊者と迦葉尊者という二人の弟子を連れて四海を見物し、人間を恵みに来たまう途中にカササギの声に気づき、「瑞気が空にかかっている。人であっても、獣であっても、鬼神であっても天の知るところに違いない。行って見てきなさい」と仰せられると、弟子たちは「修道が足りないので何も見えません」と答えた。

釈迦世尊さまが黄経典を手に持ち、石舟を急がせて大洋の西村を眺めると、玉函が置かれている。

「男子ならば連れていき弟子にするものを、女子なのでしかたない」と榛の木のかげに移し置くと、貧しい身なりの功德を求める翁と媼が、藁で編んだ岩巾（帽子）<sup>タンゴン</sup>を深くかぶり、紫の背囊を背負って地獄の歌を唱えつつ歩いていた。

「御身らは人間か」と尋ねると、「鬼神でも獣でもありません。この山を守り、功德を求める翁と媼でございます」と答える。

釈迦世尊さまが「御身らは〈功德〉が何であるか知っているか」と尋ねると、「深い川に橋を架ける〈越川功德〉、寺を建てる〈為人功德〉、衣類のない人には衣類を、食べもののない人には食べものを与える〈活人功德〉、のどの渇いた人に水を与える〈給水功德〉、なかでも乳のない子に〈乳を与えて育てる功德〉が第一です」と答える。

#### 5. 山神（翁と媼）が公主の養父母となる

「それでは、この子（公主）を連れていって育てるのはどうか」と尋ねるので、「私たちは春夏秋を野に伏して暮し、冬には洞窟で暮らしています」と

答えると、「それなら、この子連れて行って育てれば、食べものも衣類も自然に手に入り、藁ぶき小屋も現れる」と仰せられて姿を消した。

翁と媼は「これは、仏様の〈道術〉に違いない」と、青い柳の枝の黄色いウグイスが、楊柳の間に飛び入る所から幼子の泣き声が聞こえるので、訪ねて行けば玉函が置かれ、金亀の錠がかけられている。

翁と媼が、父母には愛重経、国家には忠臣経、妻子と一族には愛経とく天地八経をすらすらと読経すると、玉函は鍵もないのに自然に開いた。

玉函のなかを覗き見ると、幼い公主の目には赤蟻がいっぱいで、腰にはトカゲとヘビが巻きついてた。

流れる水に洗い、身につけた衣服を脱がせて再び洗い、肌にまとわる衣を脱がせて、幼子を抱いて帰ろうとすると、それまで無かった藁葺小屋が建てられていた。

翁と媼が、幼子を育てて八、九歳になると、子どもは学びもしないのに天文・地理・六韜三略（兵法）のすべてに通じていた。

子どもは、「空を飛ぶ鳥にも、地をはう虫にも、みな父と母があるのに、私の母はどこにおられるのでしょうか。私の父はどこにおられるのでしょうか。母上と父上を教えてください」という。

翁と媼が「父はこの翁で、母はこの媼である」と言っても、「翁・媼よ、嘘をついてはいけません。このように年老いた者が、どうして私のような幼い子どもを産むことができますよう」と言う。

翁と媼には後継ぎもなく寂しいので、娘に頼ろうするが、「母上・父上を教えてください」と願いつづけるので、「おまえの父は天で、母は地である」と答えるが、「天地は、天地の万物を創造されたに違いありませんが、どうして人間の骨肉を作ることができますよう。どうぞ本当のことを教えてください」と願いつづける。

そこで、「全羅道の王竹は、父親が亡くなれば両端を切っても根づく。三年の間哀哭すれば、全羅道の竹は父親であり、後園の桐の木は母親である」と答えた。

娘は、全羅道の王竹は遠すぎて日に三度安否を問うのは難しいが、後園の桐の木には三度安否を問う儀礼を尽くした。

## 6. 公主の両親の病

歳月は流れて十五歳となったある日、娘の洗面の器に日月が落ちるのが見えた。

歳月の流れのうちに、国王殿下のお病気が危篤となり、大王殿下は、天下宮に卜占を命じた。

「卜占には供え物が必要です」と答えると、銀錢五匁、金錢五匁、真珠三升三合、絹三尺三寸などが用意されたので、天下宮の多智博士、帝釈宮の牡丹博士が、白玉盤上に白米を投じて占えば、最初は萬神（巫女）の一投、次は上下の門神の一投、三度目が国王殿下の占いとなった。

「いずれお分かりになることですが、西海は日が暮れるという卦（占いの答え）であり、東海は月が昇るという卦ですから、国王両殿下は同日同時に亡くなられるでしょう。第七公主を捨てた場所をお尋ねなさい」ということだった。

国王両殿下にこう申し上げると、「陸地に捨てたものなら、臣下たちにも尋ねられようが、(海に流してしまったのだから)誰が尋ねることができようか」と答えた。

両殿下が同日同時に見られた夢に、大明殿の棟上から六人の青衣をつけた童子が降りてきて、そろって挨拶するので「お前たちは人間なのか鬼神なのか。ここは飛ぶ鳥も入ることができない所なのに、どうして入ってきたのか」と尋ねた。

童子たちは、「私たちは人間でも鬼神でもありません。天の青衣童子で、玉皇上帝の御命令で、国王殿下のお命（命牌）を酆都島（冥府・道教の死者の国）に幽閉するために参上しました」と答えた。

国王が「それは、どういうことか。臣下の内に怨みがあるからか、万民のうちに怨みを抱く民があるためか」と尋ねると、「怨臣、怨民があるからではございません。天の知る稚児（公主）を捨てられた罪のゆえに、同日同時に病にかかり、同日同時に亡くなられるのです」

「それでは、私はどうすれば救われるのか」と尋ねると、「捨てた公主を尋ねて、三神山の不死薬、無上神の薬霊水、東海龍王のヒレ酒、蓬萊山のカヤム草、アナ山の狗舌草を求め、それを召し上がれば救われるでしょう」とい

う答えが返ってきた。

## 7. 実父母による公主の搜索と発見

### 7-1. 公主の搜索

国王は「諸臣のうちに公主（捨姫）を尋ね当てる者があれば、千金の賞を与え万戸侯（万戸を率いる将軍）とし、国の半分を与えよう」と言ったが、臣下はみな黙って答えなかった。

「薬水のみでも求めきたる者があれば、万戸侯に封じよう」と言うと、「東海の龍宮も西海の龍宮も天宮なので命を懸けても行くことができないし、陸地に捨てたものなら尋ねる臣下もありましょうが、水中に投げ入れてしまった稚児を尋ねることができるでしょうか」と答えるばかり。

しかし、その中で禮大臣が、「私は代々孫々、国の禄をはむ臣ですから、このまま座視することはできません。探索の途上に死すとも探し求めてまいります」と答えた。

禮大臣は、国王両陛下の封書と姉の六公主の封書、残された稚児の遺物とを持ち、宮女は対をなして従い、五営門は総出して門を出ると、行くべき先を示すカササギが、西村に向けて引導し、すべての草木は頭を下げて行方を導く。

### 7-2. 公主の発見

山河千里の国であるので、山々は深く、ホトトギスは悲しく鳴き、金色のウグイスは楊柳の間を飛び交って、前は黄泉江、後ろは流沙江、カルチ山、カルチ峠、プルチ山、プルチ峠を越え、南無阿弥陀仏の念仏を唱えオサチの大祥庵に立ち入ると、功德を求める貧しい媼と翁が「御身は人間なのか鬼神なのか。ここは飛ぶ鳥も入ることができない所なのに、どうして入ってきたのか」と尋ねた。

「私は国王殿下の命に従い、捨てられた稚児を尋ねてやってきた」と答えると、公主が「国王の子孫ならば、なぜ私を罪深いとして奥深い楚山（北の果ての地）に投げ捨てたのか」と問い返す。

「稚児の七日内のチョゴリを持参した」と言えば、「七日内のチョゴリなど、私が知るものか」と答える。

「国王殿下の封書と六公主の封書を持参した」と言えば、「私が封書を知るものか、証拠の品を持ってきなさい」と答える。

そこで両殿下の拇指を切って金の盤に乗せ、公主の無名指（薬指）を切って合わせると、雲のように立ち上った。

この時始めて「行こう」と言われたので、禮大臣が「行幸の列を整えて参りましょう。公主の輿を用意いたしましょうか」と尋ねると、公主は「楚山に捨てられた私に、公主の輿はふさわしくない。馬一頭で行こう」と言われた。

## 8. 公主の異界遍歴（神仏の世界・地獄）

公主が、禮大臣に導かれて宮廷門外に待つと、国王両殿下は「第七公主を早く入れなさい」と仰せられ、公主の手を握り、涙を流されて「お前が憎かったから捨てたのではない。激情にかられて捨ててしまったのだ。憤怒にかられて捨てたのだ。寒さ、暑さのうちにいかに暮らしたのか。飢えて、親を恋しく思いながら、いかに暮らしたのか」と尋ねた。

公主は「功德を求める乞食の媼と翁の功德にすがって暮らしました」と答えた。

山河千里の国に無情の時が流れ、大王殿下の病は重いので、「無上神仙の薬霊水を手に入れて、国家を安んじ奉れ」と宮廷中の百官、侍女、国中の百姓に呼びかけるが、みな、「この世の薬ではないので、どうして求められましょう」との答え。

第一公主に「父母の孝養のために求め行かぬか」と尋ねてみても、「三千宮女の求められぬ薬を、どうして私が手に入れることができるでしょう」と答える。

第二公主に「父母の孝養のために求め行かぬか」と尋ねても、「姉上のできないことが、どうして私ができるでしょう」と答える。

第三公主に「父母の孝養のために行かぬか」と尋ねても、「二人の姉上ができないのに、どうして私にできるでしょう」と答える。

第四公主に「父母の孝養のために行かぬか」と尋ねても、「三人の姉上が行かれないのに、どうして私に行けるでしょう」と答える。



第五公主に「父母の孝養のために行かぬか」と尋ねても、「四人の姉上が行かれないのに、どうして私に行けるでしょう」と答える。

第六公主に「父母の孝養のために行かぬか」と尋ねても、「五人の姉上が行かれないのに、どうして私に行けるでしょう」と答える。

第七公主を呼び出して「父母の孝養のために行かぬか」と尋ねると、「国王の御恩にあずかったことはないけれども、母君の腹中に十月留まった御恩があるので、私が行きましょう」と答える。

「行幸の列を整えましょう。公主の輿を用意いたしましょう」と尋ねると、公主は「馬一頭で参ります」と答えた。

四升布（升は布の単位）で上衣と下衣、五升布で周衣（上着）を作り、双髻を結び、竹の平涼子（帽子）を五十、鉄の杖をつき、銀のチゲ（背負子）に金の鎖をかけて背負い、両殿下から旅行手形を受け、パジ（ズボン）の紐に結びつけ、六人の姉の旅行手形を受け、パジの紐に結びつけて、「六人の姉上よ、三千の宮女たちよ、大王両殿下が同日同時に亡くなられても、私が帰るまでは大葬を挙行しないでください」と言って、両殿下に別れをつけ、六人の姉に別れをつけて宮城の門を出て行ったが、行くべき方向も知らなかった。

### 8-1. 神仏の世界と地獄

公主は杖を、一度回してつけば一千里を歩き、二度回してつけば二千里を歩き、三度回してつけば三千里を歩く。折しも春三月のよい季節で、李花、桃花は満開で、香花・芳草が咲き乱れ、黄色のウグイスは楊柳の間を飛び交い、鸚鵡・孔雀は羽ばたき、郭公は友をよび、西の山に日は暮れて、月は東の嶺に昇る。座して遠くを眺めやると、かすかに見える金の岩の盤松の陰に、釈迦世尊さまが地藏菩薩さまと阿弥陀仏さまとともに説法されている。

公主は近づいて、三拝また三拝、三三九拝すれば、釈迦世尊さまが、「御身は人間なのか鬼神なのか。ここは飛ぶ鳥も這う虫も入ることができない所なのに、どうして入ってきたのか」と尋ねた。

公主が、「私は国王の世子で、父母の孝養をつくすために来ましたが道に迷ってしまいました。仏さまの御徳によって、正しい道に導いてください」と申し上げると、釈迦世尊は、「国王に七公主があると聞いていたが、世子大

君があるとは初めて聞く。国王が汝を太洋西村に捨てた時に、汝の命を救ったが、さもあらばあれ、ここまで平地三千里をきたが、この先の険しい三千里の道をどのように行くのか」と仰せられた。

公主が、「たとえ途中で死すとも、行きます」と答えると、「羅華（曼荼羅華）を与えるから、これを持っていきなさい。途中に大海があるが、この花を揺すれば大海は陸地となるだろう。茨の城や鉄の城が聳えていても、仏の教えを思い出し、この花を揺すれば、腕のない鬼神、脚のない鬼神、目のない鬼神、億万の鬼卒が蛙のように騒ぎだすだろう。刀の山地獄、火の山地獄の門と、八万四千の諸地獄の門が開かれ、（死者を裁く）十王のもとに往くものは十王に送り、地獄に往くものは地獄に送る。

## 9. 援助者（無上神仙）の出現

公主の立つところを眺めれば、東には青い瑠璃の牆門（垣根と門）、西には白い瑠璃の牆門、南には紅色の瑠璃の牆門、北には黒い瑠璃の牆門、中央には貞烈門が立ち、無上神仙が立っている。無上神仙の背の高さは天に届くばかりで、顔は鈴のように大きく、目は燈盞（油皿）のように輝き、鼻は橘瓶を吊るしたようで、手は釜蓋のようで、足は三尺三寸もある。

あまりに恐ろしいので、驚き退いて三拝すると、無上神仙は、「お前は人間なのか鬼神なのか。ここは飛ぶ鳥も這う虫も入ることができない所なのに、どうして入ってきたのか、何処からきたのか」と尋ねた。

公主は「国王殿下の世子で、父母に孝養をつくすために参りました」と答えた。

無上神仙が「父母に孝養をつくすためにきたというなら、水を手に入れる値、木を手に入れる値を持参したか」と尋ねるので、「いそいで来たので忘れてしまいました」と答える。

無上神仙は「それでは水を三年汲みなさい、火を三年焚きなさい、木を三年伐りなさい」と言う。

公主が三年を三回、合わせて九年奉仕すると、無上神仙が言うには、「御身は前から見れば女性のように、背後から見れば国王のようであるので、御身と私の間で百年の契りを結び、七人の男子を産んで帰るとするのは如何か」

と言うので、公主は「それが父母に対する孝養となるなら、そうしましょう」と答えた。

## 10. 男子だけの誕生と必要なもの（薬水）の獲得と家族の再会

### 10-1. 男子だけの誕生

天地を帳とし、藤葛を枕とし、芝草を敷き布団、群雲を掛け布団、金星を灯とし、夜を五つに分けた初更に約束を交わし、二更に同衾し、三更、四更、五更に契りを結び、七人の男子を産んだ後に、公主が言うことには「夫婦の情けも大切ですが、父母に対する孝養には及びません。初更に夢を見ると銀の鉢が破れて見え、二更に夢を見ると銀の匙が折れました。両殿下が同日同時に亡くなられたのは明らかです」

### 10-2. 命の水（薬霊水）の獲得

無上神仙はこれに応じて「御身の汲んだ水は薬霊水であるから、金の甕に入れて背負っていきなさい。御身の伐った木は骨肉を生かすものだから、これを持参しなさい。前の海を眺めながら行きなさい」と言う。

公主は「海の眺めにも感興がわくことはありません」と答える。

無上神仙は「裏山の花を眺めて行きなさい」というが、公主は「花の眺めにも興がわくことはありません」と答える。

無上神仙は「私は以前には一人やもめであったが、いまは八人のやもめ暮しとなったので、どうしていいか分からない。七人の稚児を連れて帰りなさい」と言う。公主は「それも父母孝養となるならば、そう致しましょう。大きな子どもは歩かせて、幼い子どもは背中に負っていきましょう」と答えた。

無情神仙は、なおも「私が御身の後を追うのはどうだろう」と言う。

公主は「女は必ず夫に従うというのであれば、それも父母孝養のうちでしょうから、そのように致しましょう。一人で来て、九人で帰りましょう」と答える。

### 10-3. 公主の地獄遍歴

前は黄泉江、後ろは流沙江が控える。

「カササギの騒ぐ血の海を、連なり行くのは何の舟か」

「その舟は前世にあって、父母には孝子、国家には忠臣、兄弟には友愛あ

り、一家には和睦した者の乗る舟である」

またある所に至れば、「血の海に底なき舟が浮かび、七、八月に蛙が鳴くように泣き叫びながら行く。その舟は何の舟か」

「その舟は前世にあって、父母には不幸、国家には逆賊、兄弟には友愛なく、小さな舟で貸し、大きな舟で返済を求め、砕けた米を動鈴に与え、人を陥れた罪によって、億万四千の諸地獄へ泣きながら行く舟である」

「乗るもののない舟は、何の舟か」

「それは前世にあって、子どもを得ることがなかった鬼神の舟で、海の彼方に行く舟である」

楚山の牧童たちよ、長安（都）の広場に、多くの人が集まっているのは何故か」

「私たちに施しものを授けてくれれば教えよう」

「施しものとは何か」と、子どもを背負っていた布の七尺七寸を与えると、牧童は口を開いて「母親の腹中の子どもはともかく、生まれ出た子どもは誰でも、國王兩殿下が同日同時に亡くなられて大葬が行われることを知っているのに、御身は人間なのか鬼神なのか。第七公主は、薬水を求めて三千里の旅に出たが、生死の消息が途絶えてしまった」

第七公主はあっと驚いて、七人の子どもを藪に、無上神仙を林に隠した。

#### 10-4. 家族の再会

大葬の儀仗である銘旌（めいせい旗）と翊扇（そうせん長柄のうちわ）を見れば、王のものであることは明らかで、袞袍（王の衣裳）の冕章（王の徴）を見れば王であることは明らかである。

頭髪を解いて喪をあらわし、「侍女尚宮は帳の内で待衛たいえいしなさい（お守りなさい）。万民朝臣は帳の外で待衛たいえいしなさい。王妃の小さな輿と王の大きな輿を降ろしなさい」

棺（ひつぎ）の青い蓋を上げて四方の付けめをはずし、遺骸のセカ所の外結びをはずし、息を入れては息を蘇らせ、骨を入れては骨を蘇らせ、肉を入れては肉を蘇らせ、目には日映珠（イルヨンジュ日の映る珠）を入れ、口に薬靈水よみがえを含ませると、同日同時に甦よみがえられた。

兩殿下が、「深く眠ったものだ。前の海を眺めに出ていたのだろうか。裏山

の花を見に出ていたのだろうか」と仰せられたので、「前の海を眺めに出ていたのでも、裏山の花を見に出ていたのでもありません。同日同時に亡くなられ、大葬に出ておられたのです。第七公主が薬水を求める三千里の旅をして、回春薬を手に入れられたので、同日同時に蘇られたのです」と申し上げ、大葬命の代わりに行幸令を発した。

宮廷の百官と三千宮女の山のような万歳の響きの後に、万民の万歳がとどろいた。

## 11. 女性（巫女）によって主宰されるあの世

両殿下が、「宮廷百官の見舞いはうけたが、公主は何故見舞いに来ないのか」と問うので、「お嬢さまは罪を犯していらしたのです。父上の許しもないままに無上仙官と夫婦になり、七人の子どもを産んでもどって来られたのです」と答えると、「それは公主の罪ではなく、私の罪だ。公主に国の半分を与えようか、都の四大門から入る反物を与えようか」と仰せられる。

### 11-1. 公主が巫堂の祖となりあの世を主宰する

公主は「国も保たれてこそ国であり、反物も保たれてこそ反物です。私は父母のもとで美味しいものを食べ、美しい衣装を身につけることができませんでしたから、萬神の人為王（ムーダン）になりましょう。四代までの祖霊には百斎日（百日忌）の供養を行い、それ以上の祖霊には幽斎日（六斎日）の供養を行い、身には頭飾繡上衣、禮裳、唐靴、ウナモングトリ（蒙頭里・ムーダンの上着）、握り鈴、幅広の紅帯、五十骨扇子という巫堂の衣装をつけて、萬神の主となりましょう。

### 11-2. 公主の一族の処遇

国王が、「無上仙官・駙馬大鑑（公主の賀）は、ここに来なさい」と仰せられるが、「南大門に紗帽がかかってしまって入ることができません」

「門の下の土を掘って入りなさい」と仰せになると、「北門に腰がかかって入れません」と答える。

「門の脇を崩して入りなさい」との仰せがあり、無上仙官を昌敬宮の通明殿の広庭に立たせて見れば、とにかく背が高い。

「承伝伝官よ、姫と駙馬大鑑との背の高さを木尺で測ってみなさい」と仰

せられると、「駙馬大鑑の背丈は三十三天の三十三尺であり、姫の背丈は二十八宿の二十八尺です」と答える。

「そういうことならば、二人は天の定めた組み合わせである。無上仙官の背丈は三十三天であるから、銅鑼を打たせ、姫の背丈は二十八宿であるから、大鐘を打たせるがよい」

「それぞれ皆の衣食制度をお定めください」

そこで、無上仙官・付き馬大鑑は、某亡者（儀礼の願主）が大きな道と小さな道で行う祭りの食器・大卓の食物に与かるように定め、釈迦世尊は初齋、二齋、七七・四十九齋、百齋に与かり、桃李東山の牧童降臨道令は七尺七寸の明道手巾に与かり、乞食功德の媼は茨の門と鉄の門の麻布に与かり、乞食功德の翁は伐草ナムヒャンに与かり、七人の子どもは二錢一分の仏錢に与かるように定めた。